

# 南十字星

大阪大学外国語学部  
(旧大阪外国語大学)  
インドネシア語同窓会

2013年秋 第17号  
発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402  
電話 Fax 072-753-1693  
Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

## スハルト大統領 表敬訪問通訳の思い出

滝本 佳一 (1960卒)



《はじめに》 これまで南十字星会誌には市村真一先生の大変アカデミックなお話や各分野で活躍された諸兄、諸姉のお話が掲載され、興味深く楽しく読ませていただきました。この度、寄稿の依頼を受け諸兄、諸姉があまり経験されていないであろうスハルト大統領表敬通訳の思い出を、話すことにしました。

15年間のジャカルタ駐在中、私は勤務する会社や関係メーカートップの大統領表敬訪問通訳を7度経験しました。あまりタッチな話は避けたので中味のない話になったかも知れませんが、ご容赦願います。

なお、1度だけの経験ではありますが、実は私、1977年9月27日、クアラルンプール近郊のゴム林に墜落炎上した東京発、香港ークアラルンプール経由シンガポール行き JAL715 便の乗客として、多少の怪我を負ったものの無事助かった1人であります。

《まずは自己紹介です》 思い起こせば、1期校受験に2度落ち1浪で明確な目標と気構えもなく入学。陸上競技部(OGAC)に席をおき、憂さ晴らししながら勉学に励んだ、というより要領よく卒業した感があります(④は卒業写真。前列左から2人目が筆者)。同期の西田達雄君と一緒に住友商事に入社し、西田君は東京、私は大阪勤務でした。1964年マレーシアのクアラルンプール事務所駐在を皮切りに以降ジャカルタ駐在5回15年、その間サウジアラビアのジ



ェッダに6カ月の長期出張、そしてイラクのバクダッド事務所にて一年半と合計20年、いずれもイスラム圏での駐在でした。在職中は鉄道車両と自動車の輸出が主たる担当業務でした。

《初めてのインドネシア駐在》 1968年、私の初めてのジャカルタ駐在であった。当時ジャカルタ事務所にはインドネシア語の達人榎谷昌博先輩(56年卒)がおられたが、課長として帰国されたため事務所長は達人無き後を心配され、私に家庭教師を雇うように指示された。私は当時インドネシア大使館におられた増井正先輩(56年卒)が個人教授を受けられたインドネシア大学の言語学教授を紹介いただき、同教授からインドネシアの一流日刊紙コンパス紙の社説を教材に3ヵ月間毎週土曜日の午後(仲間はゴルフに出かけたのに)個人教授を受けた。毎回の予習復習が義務付けられた相当しんどい特訓で、卒業後約10年にしてインドネシア語を必死で勉強した。

《スハルト大統領表敬訪問通訳、その1》 1976年6月16日、スハルト大統領の執務オフィスであるビナグラハに当社柴山幸雄社長が大統領を表敬訪問した。私の2回目のジャカルタ駐在時であった。当社の社長がスハルト大統領を表敬訪問するのは初めてのことで、住友化学と当社が中心となり取り組み実現した日本・インドネシアのナショナルプロジェクトであるPT インドネシア・アサハン・アルミニウム(アルミ製錬プロジェクト)設立の報告であった。



当時は一民間企業の社長がスハルト大統領を表敬訪問するのは稀だったのか、須之部量三大使が当社の幹部や事務所長と一緒に臨席された(写真=左からスハルト、筆者、柴山社長、須之部大使)。当日ビナグラハの待合室で待機していると大統領の公式通訳官、WIDODO SUTIYO (スハルト政権中通訳を務め、4~5カ国語に堪能で語学の天才ともいわれた)が、私にこうアドバイスした。

①インドネシア語での通訳と聞いているが、英語も出来るか。万一あがって大統領の言葉が分からなくなれば私が英語に訳すので心配するな。その時に備え、大統領の席から数メートル離れて同席する。

②大統領との会話の要領はまず表敬者が一方的に話し、話し終われば大統領が話すので、大統領自身が質問しない限り途中で口を挟まないように。

大統領の執務室に入るや否やカメラのフラッシュとテレビ放映のためのビデオ撮りが始まった。大統領と表敬者の間の小さな椅子に座ると、当時55歳の上品でハンサムなスハルト大統領の顔が本当に間近にあった。柴山社長の話が終わると大統領は私の手許のメモに時々目をやりながら、適当な区切りでゆっくりとはっきりとした声で話してくれた。「これまでオランダがそしてソ連が取り組み、途中で諦めたアサハンアルミ製錬プロジェクトの実現は IMPIAN KAMI (われわれの夢)であった。心から喜び感謝している…」。

表敬を終えて帰宅すると、お手伝いたちがテレビ放映を見てトアンがプレジデンと一緒にテレビに映っていたと大騒ぎ。お陰で随分とトアンの株が上がった。

《大統領表敬訪問通訳、その2》1994年、第2回APEC首脳会議はインドネシアが議長国となりボゴール宮殿で開催され、「ボゴール宣言」となった。スハルト大統領は見事に主役を演じた。まさにスハルト政権の絶頂期であった。1994年当社秋山富一社長が大統領を表敬訪問した。私にとって7度目の通訳であった。秋

山社長がAPEC首脳会議を成功に導いたスハルト大統領のリーダーシップの賛辞も含め発言を終えた直後、スハルト大統領がわが意を得たとばかりに、満面笑みを浮かべ話し始めた。(写真中、左からスハルト、筆者、秋山社長)

「私自身が各国首脳に直接電話し参加を依頼した。勿論クリントン大統領にも」。そこでスハルト大統領は少し恥ずかしそうに笑いながら「あちら(クリントン)は例の問題(不適切な)で、ごたごたしていてなかなか参加確認が取れず、手間取った。会議の当日、APEC会場のボゴールに向かう途中でも寄り道するなど色々あってやきもきした。ボゴール宣言後、外国人記者団との質疑応答でアメリカの女性記者が意地の悪い質問をしたが上手く対応した…」

表敬訪問の許容時間は通常20分程度。時間がくると秘書官が別室から出てきて、大統領の斜め後ろ1メートルで立ち止まり、無言のまま踵を返す。ところが、この日は大統領自身のおしゃべりが止まらず2度目の秘書官のお出ましをも無視。結局、その後しばらくして大統領は自らの腕の袖をめくり時計に目をやり、相当タイムオーバーで表敬訪問は終わった。

表敬訪問の許容時間は通常20分程度。時間がくると秘書官が別室から出てきて、大統領の斜め後ろ1メートルで立ち止まり、無言のまま踵を返す。ところが、この日は大統領自身のおしゃべりが止まらず2度目の秘書官のお出ましをも無視。結局、その後しばらくして大統領は自らの腕の袖をめくり時計に目をやり、相当タイムオーバーで表敬訪問は終わった。

表敬訪問の許容時間は通常20分程度。時間がくると秘書官が別室から出てきて、大統領の斜め後ろ1メートルで立ち止まり、無言のまま踵を返す。ところが、この日は大統領自身のおしゃべりが止まらず2度目の秘書官のお出ましをも無視。結局、その後しばらくして大統領は自らの腕の袖をめくり時計に目をやり、相当タイムオーバーで表敬訪問は終わった。

表敬訪問の許容時間は通常20分程度。時間がくると秘書官が別室から出てきて、大統領の斜め後ろ1メートルで立ち止まり、無言のまま踵を返す。ところが、この日は大統領自身のおしゃべりが止まらず2度目の秘書官のお出ましをも無視。結局、その後しばらくして大統領は自らの腕の袖をめくり時計に目をやり、相当タイムオーバーで表敬訪問は終わった。



### 《おわりに》

2012年12月、PT. HINO INDONESIA MANUFACTURING (HIM)の創立30周年記念式典に招待されジャカルタを訪問した。1968年最初のジャカルタ駐在時の私の任務は、マツダと日野自動車の現地代理店の選定で、どちらもゼロからの出発であった。HIMは日野自動車、住友商事、現地代理店の3社合弁会社として1982年に設立され、30年を経た現在、日野自動車の中型、大型トラック、バスの年間販売台数は2万台、50%を超える占拠率を誇り日本国内販売をも上回り、同社にとって世界一の市場に育っていた。式典で私は「井戸を掘った人」として紹介され、今年喜寿を迎える私には晴れがましいお祝いとなった(㊦記念写真)。

“ASEANの時代”の到来である。インドネシアが政治、経済、外交の核となりASEANの牽引車としてさらなる発展を期待したい。

“ASEANの時代”の到来である。インドネシアが政治、経済、外交の核となりASEANの牽引車としてさらなる発展を期待したい。



## Mengajar di Jepang

## Kenangan Ajip Rosidi

(アイプ・ロシディ  
元大阪外大教員)



箕面キャンパス

Ketika pada tahun 1980 saya menjadi tamu (*fellow*) The Japan Foundation di Kyoto, Prof. Morimura Shigeru dari Osaka Gaidai datang menemui saya di rumah yang saya séwa di Iwakura. Kecuali berkenalan, Prof. Morimura meminta saya agar bersedia mengajar bahasa Indonésia di Osaka Gaidai menggantikan Pak Ismail Nazir yang akan pensiun karena telah mengajar sejak tahun 1938. Jawaban saya terhadap tawaran itu spontan: menolak, karena saya di Jakarta mempunyai banyak pekerjaan yang harus dihadapi. Saya mengajukan beberapa nama yang menurut pertimbangan saya akan lebih baik daripada saya kalau mengajar bahasa Indonésia. Tapi Prof. Morimura tetap meminta saya dan membujuk saya dengan berbagai cara.

Setelah melihat bahwa saya tetap tak terbujuk, Prof. Morimura mengundang saya untuk melihat kampus Osaka Gaidai di Minoo. Saya merasa tidak keberatan untuk melihat-lihat kampus yang konon terletak di atas bukit. Kampus lama terletak di dalam kota, tetapi sejak tahun sebelumnya Osaka Gaidai menempati kampus yang baru di luar kota.

Saya diperkenalkan dengan Réktor Osaka Gaidai waktu itu, ahli bahasa dan kebudayaan Cina. Lalu diajak berkeliling melihat-lihat perpustakaan, bangunan tempat olah raga, asrama untuk mahasiswa asing, dan kelas-kelas tempat mengajar dan kamar untuk para dosén. Waktu tiba di sebuah kamar untuk dosén, Prof. Morimura berkata bahwa kalau saya jadi mengajar di situ maka saya akan menempati kamar itu. Kamar itu cukup luas, tetapi kamar kerja saya di Jakarta lebih luas. Tapi ada keterangan



## ◇プロフィール◇

1938年1月31日、西ジャワの生まれ。文学者の“芽”は小・中学生の頃から。新聞や雑誌に作品が掲載される。20歳代で詩人・小説家として創作活動を本格化させ、スンダ語とインドネシア語で作品を次々と発表。英語、日本語、ロシア語、オランダ語などに翻訳された書も含まれており、日本語訳では62年卒の粕谷俊樹氏訳の作品も(「スンダ・過ぎし日の夢」1987年など)。地方文化を支援する基金団体「Yayasan Kebudayaan Rancage」を設立した。各方面から文学賞を受け、日本滞在中の1999年には勲三等瑞宝章を受賞。現住所はDesa Pabelan Mungkid 56551 Magelang, Jawa Tengah, Indonesia

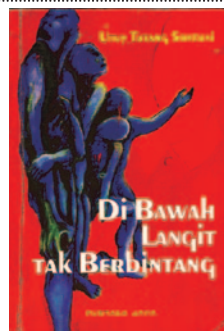
beliau yang diucapkan pada waktu itu yang melekat dalam kepala saya, ialah bahwa kalau saya mengajar di Osaka Gaidai, saya tidak usah datang ke kampus saban hari, cukup dua hari saja seminggu. Artinya lima hari lainnya saya boléh tinggal di rumah untuk membaca atau menulis. Selama beberapa tahun terakhir di Jakarta, saya disibukkan oléh berbagai urusan pekerjaan dan organisasi, sehingga tidak ada waktu buat membaca apalagi menulis! Yang saya baca dan tulis hanya hal-hal yang bertalian dengan pekerjaan, padahal saya menganggap diri sebagai pengarang.



2010年9月、Magelangのご自宅訪問時の写真  
=磯浦美恵子(58年卒)

Akhirnya dengan berbagai pertimbangan lain, saya menerima tawaran Osaka Gaidai untuk mengajar bahasa dan kebudayaan Indonésia. Mula-mula untuk dua tahun, tetapi karena Prof. Morimura terus membujuk agar saya terus mengajar sampai pensiun, saya baru berhenti mengajar di Osaka Gaidai ketika umur saya 65 tahun, yaitu pada tahun 2003. Saya mulai mengajar di Osaka Gaidai bulan April 1981 dan berhenti pada akhir bulan Maret 2003. Artinya selama 22 tahun.

Selama itu saya selain mengajar sesuai dengan kewajiban saya (tidak hanya di Osaka Gaidai karena saya juga diminta mengajar di Kyoto Sangyo Daigaku dan Ténri Daigaku di samping pada kursus bahasa Indonésia di Asahi Cutural Center), saya banyak membaca dan menulis. Berbagai buku karya sastra dan buku tentang téori dan kritik sastra yang ketika di Indonésia tak sempat saya baca (karena bukunya tidak sampai masuk ke Indonésia), saya baca selama tinggal di Jepang.



外大の授業で教科書として使われた懐かしい文学書。巻頭に監修されたアイプ先生の Pengantar(序文)が 14 頁にわたって書かれています。  
=芝田垂希(03年卒)



アイプ先生との出会いは約 32 年前。阿倍野のお宅によく寄せていただき、先輩後輩 5 人でジャカルタのお家にもお伺いし、楽しい時間を過ごさせてもらいました。卒業後は Ramadan だったにもかかわらず、ご夫妻で私の結婚式にご出席願ひ、すぐ目の前で祝辞も頂戴しました。後方の女性は、通訳してくれた同学年の橋野由子(旧姓角田)さんです。忘れられない思い出となりました。(カメラマンのミスで、写真を送ることができず、申し訳ありませんでした)  
=後藤淑子(84年卒)



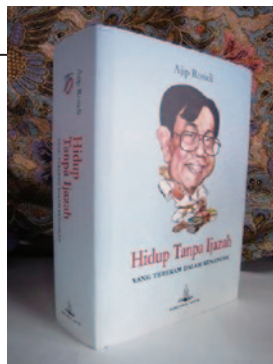
Selama saya tinggal di Jepang, saya juga banyak menulis buku yang jumlahnya hampir 40 judul, baik berupa karya sastra, kumpulan kritik dan éesai, hasil penelitian, biografi, suntingan karya orang lain, dan lain-lain. Sebagian besar buku itu ditulis dalam bahasa Sunda, yang lainnya dalam bahasa Indonésia.<sup>1</sup> Di antaranya ada yang sudah diterjemahkan ke dalam bahasa Jepang.



留学時に大変お世話になりました。Jakarta 経由で Ajip 先生のお宅に宿泊(2泊3日)。手配した鉄道切符を、急きょキャンセル、Jogja まで運転手つき車で送っていただきました。写真は途中 Bojang で食事したさい。2003年4月13日 ㊦端は同学年の平岡理恵子さん =角村めぐみ(05年卒)

Maka tinggal di Jepang selama 22 tahun bagi saya bukan saja merupakan kesempatan untuk menikmati hidup di negara maju, di mana setiap orang dihargai sebagai manusia dan dihormati semua haknya oléh pemerintah, melainkan merupakan tahun-tahun yang produktif. Di samping itu saya juga mendapat kesempatan menyambung silaturahmi dengan para Indonésianis terkemuka dari seluruh dunia yang sering diundang ke Jepang. Tentu saja saya juga mendapat banyak teman orang Jepang, baik ahli keindonésiaan maupun bukan. Bahkan anak saya yang laki-laki menikah dengan gadis Jepang dan sekarang mempunyai dua orang anak gadis – artinya cucu saya.

アイプ先生の自伝 古希を記念して出版した。1364頁。単価は30万ルピア(当時のレートで4000円弱)が見込まれ、庶民に手が届きにくい額。そこで出版社から外大関係者やOBらに話が持ちかけられ1冊100万ルピアの設定で賛助金を加えた「特別版」を制作、その支援分で価格を下げる提案があった。特別版には協力者100人を超す氏名を掲載。初版価格は9500ルピアになったという。



<sup>1</sup> Meréka yang merasa penasaran mengenai judul-judul buku yang saya tulis lihat “Daftar Buku Ajip Rosidi” dalam otobiografi saya *Hidup Tanpa Ijazah* (Jakarta, Pustaka Jaya, 2008) hlm. 1249-1258.



2010年7月、Magelangのご自宅にお邪魔したところ、奥様が経営されているというレストランでおもてないただきました。同行した同僚(手前の男女2人。女性はタイ人やフィリピン人によく間違われるそうです。小生は後方のメガネ姿)とは、時折小生の通訳を介してコミュニケーション。アイプ先生は初対面の人でも、それほど意識されることもなく、さまざまな話題に花を咲かせて、貴重な時間となりました。 =里 真吾(02年卒)



## キャンパス便り

言語文化研究科 准教授 菅原 由美

(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

### 平成 25 年度新入生入学

4月、今年はいンドネシア語専攻に13人の新入生が入ってきました(日本語専攻学生1人含む)。男性が3人、女性が10人。今年もまた、女性パワーの方が強そうです。仲のよいクラスで、13人揃って行動しているケースが多いように思います。阪大のE-learningを十分に活用して、前期の授業が終了しました。夏はみんな揃って、ガジャマダ大学での合宿に参加することに

### PPI-Osaka・Nara との交流会

インドネシア専攻の学生たちが、4月から在日インドネシア留学生協会 Persatuan Pelajar Indonesia (PPI) Jepang の大阪・奈良支部との交流会を始めました。現在、阪大の3つのキャンパスでは数多くのインドネシア人留学生が勉強しています。彼らはまた PPI-Osaka・Nara の主要メン



バーでもあります。彼らとの話し合いにより、4月から6月まで1カ月に1度、吹田キャンパスの図書館や食堂に集まって、日本とインドネシアの文化の違いについて互いに発表しあう機会を持ちました。

7月には、彼らが開催していた断食明けの食事会(buka puasa bersama)にも参加してきました。これからもさらに活動を広げていこうと考えています。

### 共同研究室活動 インドネシア料理会

例年通り、共同研究室で、6月20日に、2年生が中心になって、インドネシア料理を作りました。今回のメニューは、再びソト・アヤム(写真)とピサン・ゴレン

でもや苦労して、バワン・メラ(赤タマネギ)とバワン・プティ(ニンニク)などの香辛料を大量にみじん切りして作りました(ちなみに「バワン・メラ、バワン・プティ」は、今年の語劇のタイトルです)。PPI-Osaka・Naraに宣伝をしたためか、料理ができあがる頃、大量のお客さんがやってきました。そのため、共同研究室は、インドネシア専攻の学生だけでなく、インドネシア人留学生であふれかえっていました。

### 在大阪総領事特別講演会

7月2日に、在大阪インドネシア共和国総領事館総領事のイブヌ・ハディ(Ibnu Hadi)氏が箕面キャンパスで、特別講演をしてくださいました。“Indonesia: The Emerging Power”というタイトルで、これからますます経済的発展が期待されているインドネシアについてのお話でした。公演後、食堂で懇親会を開きました。

学生達が総領事や通訳の方と直接お話できる機会を持つことができ、非常に貴重な機会となりました。残念なことに、イブヌ・ハディ氏はもうすぐ帰国されま



すが、次の総領事も彼のように幅広い交流をしてくれる方であることを望みます。

### 夏祭り

7月13日土曜日、箕面キャンパスで学生待望の夏祭りが開催されました。今年は、2年生がピサン・ゴレン、3年生がタピオカ・ジュース、4年生がサテ・アヤムと、

各学年が出店しました。昼間は、グラウンドで非常に暑い中での営業だったのですが、夕方は退去しなければならぬほどの大雨。なかなかハードな1日でしたが、売り上げはよかったです。

4月に入学した新入生たち13人



になりました。ディスカッション、がんばって。



## 《教員の現在の研究から》

# ワヤンとコミック

准教授 福岡 まどか



前回このコーナーのトピックを書いた時に、インドネシアの代表的芸能として知られるワヤンをもとにしてコミックを作ったコサシさん (R. A. Kosasih 1919-2012) というコミック作家を紹介しました。残念ながらコサシさんは2012年7月に93歳で亡くなりました。コサシさんのコミックはジャワ島で非常に親

シクニは、敵方コラワの参謀で、様々な姦計を企ててはコラワの長兄をそそのかし、パンダワを苦しめてきた悪智恵のはたらく人物です。

大戦争もクライマックスをむかえ、コラワの参謀サンクニが司令官として出陣します。最初に対戦するのはパンダワの末の弟サデワで、弓矢を用いてサンクニに傷を負わせます。そこへパンダワの2番目の王子ビマが登場し、サンクニにとどめをさします(上の写真、㊦がビマ)。ビマは瀕死のサンクニに向かって、様々な姦計を用いて多くの人々をそそのかし結果的に大戦争を引き起こしたとその責任を糾弾します。そして人々をそそのかしてきたサンクニの口を爪で切り裂いてたおします。この「サンクニの戦死」の別名は「ジャヤ・スピタン」と言われていますが、これは「大きな裂傷」というような意味をもっています。サンクニの口は災いのもととなったという教訓もこめられた演目です。

コサシさんの書いたコミックの中にもサンクニの戦死を描いた部分があり (p. 624 サンクニがとどめをさされる場面)、その部分の内容も人形劇と同じになっています。

幼少時から西ジャワの人形劇に親しんでいたというコサシさんは、コミックの中に人形劇の上演内容を取り入れていたようです。一方で西ジャワにはそのコミックを読んでワヤンの物語の内容を知ったという人も多くいるので、コミックと人形劇は密接な関連を持っていたようです。コサシさんにバンドンでワヤンの上演を観る予定だとお話すると、若い世代には人形劇の伝統をしっかりと受け継いで欲しいと語っておられたのが印象的でした。

西ジャワにはダダンさんをはじめとして、ユニークな上演を行う若手の人形遣いが多くいます。2012年に続いて2013年にも人形劇の調査を行いました。彼らの中には物語の新しい解釈を行って独自の上演を披露したり、楽器を改良して音楽のアレンジを工夫しているケースもあり、意欲的でエネルギッシュな上演を見ることができました。西ジャワの人形劇が若い世代にも引き継がれ、多くの人々に愛されていることがよくわかります。

このテーマに関する論文は、「インドネシアにおける伝統芸術と大衆文化の相互関係—西ジャワの人形劇とコミックのマハーバーラタ」、『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第39巻、2013年 125-151頁に書かれています。



しまれていたこともあり、亡くなったニュースも新聞や雑誌などで様々な形で報道されました。その4か月前の2012年3月(写真)にはまだお元気で、私もご自宅にうかがっていろいろなお話を聞くことができただけに残念でなりません。

今回はコサシさんのコミックと実際のワヤン上演との関連について調べた2012年3月の調査について書きたいと思います。この時はコサシさんにインタビューを行った後、西ジャワのバンドンで実際にワヤンの上演を観る機会に恵まれました。私が長年調査をしている西ジャワのワヤンは影絵ではなく木製の人形劇が主流です。スクリーンを使う影絵とは異なり人形のリアルな動きを楽しめることが特徴で、人形を操作する人形遣いの高度なテクニックが要求される芸能ジャンルです。

今回上演をしてくれたのは、バンドン南東部ジェレコン出身の人形遣いの一族「ギリ・ハルジャ」の3代目ダダン・スナンドール・スナルヤさん(1975-)です。西ジャワの人形遣いの第1人者アセップ・スナンドール・スナルヤさん(1955-)の息子さんで、若手の売れっ子の人形遣いです。お父さんのアセップさんはコサシさんが書いたコミックの愛読者でもあったようですが、ダダンさんはあまりコミックを読んでいないようです。お父さんのアセップさんから芸を習い、またパジャジャラン大学文学部で文学を勉強した経歴も持つ新しい世代の人形遣いです。

上演演目は、インドの叙事詩マハーバーラタの中の「サンクニの戦死」というエピソードです。マハーバーラタは、従兄弟同士のパンダワ5王子とコラワ100王子が王位継承権と王国の領土をめぐる大戦争を繰り広げる物語で、最終的には善を重んじるパンダワ5王子が勝利します。この演目のタイトルになっている

上演演目は、インドの叙事詩マハーバーラタの中の「サンクニの戦死」というエピソードです。マハーバーラタは、従兄弟同士のパンダワ5王子とコラワ100王子が王位継承権と王国の領土をめぐる大戦争を繰り広げる物語で、最終的には善を重んじるパンダワ5王子が勝利します。この演目のタイトルになっている



## なぜインドネシアに

土橋 瑞江 (1996 卒)

1996年に外大を卒業して以降は、1度旅行で訪れた以外はインドネシアとはほとんど関わることがなかった私ですが、2012年4月からジャカルタの日系損害保険会社で働いています。その1年半くらい前までは全くそんな展開を予想していなかったのも、人生はどう転ぶか分からないものです。

現在の会社で働き始めて、営業で日本人のお客様に接するとよく尋ねられる質問が2つあります。1つ目は「インドネシアでの生活はもう長いのですか?」。現地採用で働いていると聞くと、たいていの方がこちらでの生活が長いと考えられるようですが、「いえ、まだ1年と数カ月です」。すると腑に落ちないような表情になり、その後だいたい決まって「では、どうしてインドネシアに?」と質問が続きます。この答えは採用面接で受ける質問のように、繰り返しお話することになりました。

2010年の秋にNHKスペシャルで「灼熱アジア」という4回シリーズの番組が放送され、そのうちの1回がインドネシアについてでした。巨大イスラム市場をねえ、の副題がついたこの番組では、現地の好調な経済や日本人駐在員の奮闘ぶりが紹介され、観光地ではないジャカルタに焦点が当たっていることも珍しくとても印象的で、大変刺激を受けました。その当時、私は東京にある日本科学未来館という国立の科学館で働いていましたが、民主党の

「事業仕分け」を受けた後、職員の雇用形態についてちょうど転換・過渡期にあり、私も今後の働き方について迷っている最中でした。そんな時に見たこの番組の影響で「もう1度インドネシア語をやり直してみたら、私も現地で働けないだろうか」と不敵にも考えたのです。とはいうものの、インドネシア語



休日に会社仲間とコテージ風レストランでランチ。筆者㊟端=2013年8月



はほとんどさっぱり忘れていましたし、年齢も若いのでやり直すといっても簡単なことではありません。まず思い浮かんだ方法が、インドネシア大学のBIPAで学ぶことでした。ウェブで詳細を調べたり、松野先生にもお尋ねして在東京インドネシア大使館の担当の方を紹介いただいたりしました。その時点で手続きを始めれば、2011年1月開講のコースには間に合いませんが、5月開講の短期間コースにはなんとか間に合うでしょう、と大使館の方に言われ、慌てて準備を始めました。松野先生に特急で書いていただいた推薦状を含め必要書類もほとんど順調に揃いましたが、意外な盲点で両親が難色を示しました。結局は了承を得られ、BIPAからの入学許可も無事に下り、2011年4月末で未来館での仕事を辞め、渡航する手筈が整いました。

BIPAの編入試験を受け、なんとか中級クラスに入ることができました。5月下旬から授業が始まりましたが、オールインドネシア語の授業についていくのは大変で、少しでも集中力を欠くと初めの頃はよく迷子になったものです。毎日(月~金)2時間×2コマの授業が終わった後は心身ぐったりでしたが、授業の後も宿題やプレゼンの準備が溜まっています。こんなにも勉強に励んだ、というより追われたのは一体何年ぶりでしょうか。それでも、課外活動として週2回アルンバ(竹楽器アンクルンと竹琴のアンサンブル)の練習に参加するのは楽しく、気分転換にもなりました。あっという間に2カ月間が過ぎ、その後も上級クラスを続けるか迷いましたが、日本に帰国して就職活動をすることにしました。(写真はBIPAコース終了後に旅行。バンドアチェの津波博物館前で、同級生の亀山恵理子さんと)



前職の上司、日本科学未来館の毛利衛館長がボゴールでの会議出席後、今の会社に寄って下さった  
12年7月



東京でインドネシアでの現地採用の仕事を紹介しているエージェントの説明会と面談を経て、12月にジャカルタで数社の日系とローカル企業の面接に臨みました。今働いている会社から内定を頂いた後、就業ビザの手続きに約3カ月間かかり、冒頭に書いたように2012年4月から働いています。長くなりましたが、これが1つ目の質問の答えです。

よく受ける2つ目の質問は「どうしてインドネシア語を選んだのですか？」です。大学受験前、正直なところ

インドネシアについてほとんど知りませんでした。中高時代は英語が好きだったので、何か別の外国語を学んでみたいと考えていたくらいで、当時バルセロナ五輪前だったこともあり、「スペイン語だったらスペインでも南米でも通用するしいかな」なんて簡単に考えていました。しかしセンター試験間近のある日、ちゃんと真剣に考え直してみようと外大の受験案内をじっくり端から読んでみたところ、森村先生が寄せておられたインドネシア語学科の紹介文の中のある箇所にビビッと強く惹かれたのです。それは「赤道に浮かぶエメラルドグリーンの首飾り」とインドネシア

を例えた表現でした。予備知識もあまりなく旅行パンフレットの謳い文句に誘われるように語科を選んでしまいましたが、入学後インドネシア語を学び始め、在学中に

インドネシアを旅し、また大学で出会った留学生との交流といった体験を通して感じてきたのは、インドネシア語を選んで本当によかった、と。それでも卒業後は仕事でインドネシア語を使うこともなければ、インドネシアが多く日本人にとってタイやベトナムやシンガポールのような他の東南アジア諸国ほど身近ではなくあまり報じられることもなかったのも、個人的には親近感を持ってはいても疎遠になっていました。そんな私の人生を「灼熱アジア」が思いも寄らなかった方向に舵を切る背中を押すことになりました。「赤道に浮かぶエメラルドグリーンの首飾り (Zamrud Khatulistiwa)」との出会いもその前のもう1つの重要な転機ですが。

今の会社では、日系顧客企業の日本人・日本語対応のサポートをしています。当地では自動車メーカーを筆頭にたくさんの日系企業が進出していますが、近年製造業や建設業のみならず飲食店、小売店、物流業などサービス業の進出も目立っています。日本本社から派遣される駐在員の数も各社で限られてきており、進出間もない立ち上げ業務に忙殺されるお客様にとって、日本語でのサ

ポートは時間節約の上でも必要ですし、重宝されます。また、お付き合いの長いお客様の中には外大の先輩方をはじめ当地での経験が長い大先輩方もたくさんおられ、興味深い経験談を伺うのも楽しみのひとつです。損害保険分野での経歴もなくエイヤッと勢いで飛び込んでしまい、日々勉強することが山積みで小メモリの脳はパンク、時にはローカルスタッフとの仕事の調整に悩んだりもしますが、活気あふれる好景気の（不安要素は多々ありますが）国で働ける機会をととても有難く思っています。

仕事と並行して、これからも休みを利用して少しずつ広大なインドネシア内の様々な場所に足を伸ばしていきたいと考えています。

近いうちに実現したいのは…。ジャワ島東部のプロモ山に登ってご来光を拝み、スメル山の美しい雄姿を眺めたいですね。



④混雑するスディルマン、タムリン通りも、日曜日午前だけ“歩行者天国”に(2013年2月)

⑤は訪問中のお客様の工場敷地内に燃料値上げ反対のデモ隊が侵入(2013年6月)



寄稿

Apa &amp; siapa

## 振り返れば色いろ

加納 建子 (1970 卒)

私は高校時代にインドネシアの学校について書かれた新聞記事を読んで、インドネシア関係の仕事をしたと思い、大阪外語に入学しました。卒業は1970年です。男性同級生の大半はインドネシア関係の仕事に就職できたのですが、女性の場合は当時自宅通勤が絶対の条件でしたので、地方出身の私には就職試験を受けることすらできませんでした。卒業が迫ったある日、大阪万国博覧会 (Expo' 70) の協会本部がインドネシア語通訳を募集していることを知り、急いで応募したところ、幸いにも採用されました。配属先はテレビ電話室という当時最先端技術の部署。でも、万博見学に来るインドネシア人はみな英語が話せる人たちで、万博会場のブースにいる英語通訳の方でほとんど用が足り、残念ながら私の出番は全くありませんでした。



大阪万博は6カ月で終了、その後の職場が決まらず一時実家に帰っていたところ、ある日神戸のインドネシア領事館から電話があり、そこで働くことになりました。当時私は全く知らなかったのですが、長尾善伸さん (70年卒、当時武田薬品) がナジール先生を通して紹介して下さいました。領事館への就職は71年1月、結婚する73年4月まで働きました。この2年ほどの間にもビザの発行数は急増しました。インドネシアへの企業進出や観光客の数も急速に増えていきました。(写真は神戸港祭りに参加した時の領事館関係者。私は東スマトラの民族衣装で、元町・三宮など神戸の繁華街を歩きました。後列⑤から3人目)

その後結婚し、子供の手が離れてから小さな貿易会社に就職。電子機器の輸出、ワインの輸入、建設機械



万博協会テレビ電話室の集合写真  
最後列の⑤から5人目が筆者

の輸出などの輸出入事務などの仕事をしました。東南アジア関係も多かったのですが、インドネシアとの仕事上の付き合いがないまま今日に至っています。

私がインドネシアを初めて訪れることができたのは2005年、泉三郎さん (69年卒、当時ジェトロ勤務) にお誘いを受けたからでした。日本でのビザ取得が不要で入国時に25ドルでビザが得られたこと、東京より圧倒的に緑が多かったこと、ジャカルタの至る所にある専用バスレーンなどが強く印象に残っています。

私は20年以上、おいしくてパッケージもかわいいムレスナというスリランカ国産紅茶を愛飲してきました。スリランカは長年原料として茶葉をヨーロッパに輸出してきましたが、国産ブランドを目指したスリランカ人経営者が、国産ブランドで世界中に輸出しているのです。この紅茶を愛飲するあまり、スリランカ訪問までしましたが、かつて憧れた60年代のインドネシアの姿を現在のスリランカに見たような気がしました。

(写真=スリランカの紅茶プランテーション長屋で。左から2人目)



私が入学した1966年のインドネシア語学科は、女性が4人で、史上最高数だと言われました。最近の入学人数は女性が圧倒的に多いと聞きます。そして、卒業生の多くが商社やメーカーに就職し、インドネシア駐在者も出始めているそうです。

40数年前の女子卒業生と比べると、隔世の感があります。とても良いことだと思います。



## 「定員」問題について 総長宛に「お願い書」提出

大阪大学外国語学部のインドネシア語専攻の定員問題について、これまで会報14号及び15号にて報告してきました通りであります。これまで大学側関係者に、25言語中最下位である10名のインドネシア語の定員を増やすべく何度となくお願いしてきましたが、残念ながらこれまで進展ないのが現状です。本問題に対する打開策として、さる5月29日付けで、平野俊夫総長宛に文書にて定員増強のお願いを提出しました。スペースの関係でその全文の記載はできませんが、要旨は別掲の通りです。

残念ながら7月半ばの時点で、このお願いの文書に対する大学側からの反応は得ておりません。引き続き、出来る範囲で粘り強く動いていきたいとは思っておりますので、皆様方も是非この問題に関心を持っていただき、ご支援をお願いする次第です。

南十字星会会長 宮崎衛夫



### 要旨

- ・ インドネシア語は、1921年の大阪外国語学校創立当時の9言語学部の1つであり、現在その重要性は以前にも増して高まっている。
- ・ インドネシアはASEANの盟主的存在であり、世界第4位の人口、ASEAN唯一のG-20のメンバー国、将来の発展性、さらに我が国との関係での重要性などからして、現在の定員では社会のニーズに充分応えることは出来ない。
- ・ これまで、統合直後からこの問題で大学当局をお願いしているが、進展は見られず先のこととも全く不透明である。
- ・ 従来の定員であった20名までの復活をお願いしたい。

### ◇関東支部だより◇

今年の総会(7月6日開催)は、新・旧支部長の交代のお披露目でした。新支部長は、塩見澄氏(72年卒)です。出席者は27名。平成卒業の若手が少ないのが気になりました。宮崎会長からインドネシア語専攻の定員問題に触れて説明があり、大阪大学との統合当時は、最適員数の議論など全く無かったとのこと。はじめて実情を知った参加者も多かったようです。その後、会は和気藹々と進み、旧執行部が無事(?)総退陣して、泉会計担当幹事の中締めで終了、となりました。(前支部長 渡邊悠三)

## 消息

## ひとこと (敬称略)

池永義啓(41卒)=札幌市

札幌に在住半世紀。冬場は例年にない大雪に見舞われ“冬眠”を続けていたが、各地の気象の異変も顕著。

板坂勇夫(47卒)=東京都杉並区

役員の皆様、ご苦労さんです。

高橋良一(49卒)=兵庫県西宮市

インドネシア6年、オーストラリア30年。各地を転々、77歳で帰国して早や8年になり、体力はかなり衰えましたが、何とか元気です。会報でイスマイル先生の写真を見て、感無量です。

奥田忠志(50卒)=兵庫県西宮市

2013年1月に胃がん、転移性肝腫瘍と診断されました。余生を明るく生き抜く覚悟です。

長谷泰行(50卒)=大阪府箕面市

現在、市立豊中病院に入院中。皆様方の奮闘を祈ります。

服部英樹(56卒)=三重県四日市市

南十字星会編集の皆様のご努力、有難く存じております。

磯浦美恵子(58卒)=大阪府吹田市

会報を通じて、後輩・教え子・皆さんの活躍を知ることが出来、嬉しく思います。

山口 寛(58卒)=大阪府枚方市

チャイナ・プラス・ワンの受け皿としてASEANに期待が集まる中、南十字星会を介し先輩・後輩の終生の輪が着実に広がりつつことに誇りを禁じえません。

前田正一(59卒)=神奈川県鎌倉市

元気でボランティア活動、横浜での客船、訪日者の通訳・案内などを続けています。

西田達雄(60卒)=東京都調布市

林さん指摘の通り、インドネシア語定員を10名から20名に復活させる運動展開を幅広くやりましょう。

林 喜久雄(60卒)=兵庫県神戸市

住所を変更しました。〒651-2103 神戸市西区学園西町1-1-1 学園シティコート1011号室

堀田 実(63卒)=千葉県船橋市

早いもので卒業して丸50年。体力の衰えを感じつつも、太陽の下で遊んでいます。

井上久生(66卒)=奈良市

会報を毎号楽しく読ませていただいています。

山下勝男(66卒)=東京都

会報編集ご苦労さま。胸を張って「自画自賛」してください。毎号楽しみにしております。住所変更しました。〒185-0023 東京都国分市西元町1-1-32-703

朝倉俊雄(67卒)=神奈川県横浜市

会報16号懐かしく読ませていただきました。特別寄稿のインドネシア語の原文の挿入、昔の授業を思い出せてよかったです。今後も続けて下さるといいですね。

和田 肇(67卒)=奈良市

第16号の坂口隆史氏の「20年ぶりのジャワ・ノスタルジー・ツアー」を読み、私も実行してみたくなりました。また、イスマイル・ナジール先生の声を吹き込んだカセット・テープを懐かしく聴いております。

大野 泉(79卒)=静岡県浜松市

はじめて寄稿させていただき、「南十字星会」が一層身近なものとなりました。ありがとうございました。

亀山恵理子(96卒)=大阪府堺市

いつも会報をお送りいただき、ありがとうございます。